
教祖冷笑

巳使雄介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

教祖冷笑

【Nコード】

N5117B

【作者名】

巳使雄介

【あらすじ】

大学教員から、新興宗教の調査を依頼された柚木崎正一。そしてその柚木崎からの指示で、草野晋平が新興宗教『翌檜イメージニア協会』に潜入する。さまざまな奇術で信徒を惑わす教祖とは……？

依頼編

衣笠太一は、目の前の建物を見上げて一抹の不安を覚えた。

衣笠は学生時代に空手をやっていた。だから、例え目の前のビルに暴力団の事務所が入っていようが、怖気づかないだけの度胸も自負もある。しかし今、彼が感じた不安はそれとは別物であった。

目の前のビルの一階には算盤教室が入っており、小学生くらいの子供の姿がちらほら見える。二階には暮会所があるらしく、穏やかな老人の姿も見えた。清潔感のあるビルの外観も手伝ってか、さながら公共施設である。

だからこそ、衣笠は不安を感じたのだ。本当にここでいいのだろうか、と。

衣笠が道を間違えたわけではなければ、このビルの三階には……探偵事務所が入っているはずだった。

ポケットからB5の用紙を取り出し、プリントアウトされた地図とビルの名前を見て再確認する。やはり、ここで間違いはない。

最初に探偵事務所と聞いたとき、衣笠は瞬間的に、うらぶれた街角の怪しげなビルを思い浮かべた。実際、そこまでいなくても、探偵事務所や興信所というのは和やかな雰囲気とは程遠いものだ。

(考えていても仕方ない)

そう思い直し、衣笠は階段を昇り始めた。途中、子供と楽しげに話す老人の一団を横目に見た。こんなところに探偵事務所を構えて、果たして依頼があるのだろうか？

『柚木崎探偵社』

事務所のドアにはポップ調の文字でそう書かれていた。ますます、衣笠の抱く探偵事務所のイメージとは程遠い。

インターホンを探したが見当たらないので、衣笠はドアをノックした。

数回ノックしたところでドアが開き、短髪の青年が顔を出した。

青年は衣笠の顔を見て、困った顔をした。こちらが誰なのか、わからないのかもしれない。

「依頼していた衣笠ですが」衣笠は張りのある声で青年に言った。

「ああ、依頼人さんですか」青年は微笑むと、「どうぞ」と言っスリッパを差し出した。

青年の差し出したスリッパに衣笠が履き替えている間に、青年は奥の部屋に向かって「柚木崎さん、クライアントの方がいらっしやいました」と声をかけた。どうやらこの青年が柚木崎というわけはなさそうだ。

スリッパに履き替えた衣笠は、奥の応接室に案内された。

応接室には必要最低限の机と椅子、そしてたくさんの本棚が並んでいる。一番奥の机には長身の男が腰掛け、パソコンに向かっていた。た。

「やあ、どうも」男がパソコンから顔を上げて、衣笠に声をかけてきた。「僕が柚木崎正一です」

そう言っ立ち上がった男を、気づかれない程度に衣笠は観察した。

少し耳にかかるくらいの長めの髪は目にかかっていたが、鬱陶しいというほどでもない。営業用なのか微笑を浮かべてはいるが、快活そうには見えなかった。どちらかといえば、マニアックな……学者のイメージだ。ただ、怪しげな雰囲気はなかった。

黒のポロシャツにジーンズというラフな出で立ちの柚木崎は、衣笠にソファを勧めると、ファンヒーターを移動させ、衣笠の前に腰を下ろした。

「コーヒーでよろしいですか？」柚木崎が尋ねた。

「あつ、はい」衣笠は反射的に頷いた。衣笠はどちらかといえば紅茶党だが、言い直すのも不躰だと思い、口には出さなかった。

「草野君、コーヒー二つね」柚木崎が青年に向かって言う。衣笠を案内した青年は草野というらしかった。

「彼が居てよかった」柚木崎は笑いながら言った。「彼は日曜日だ

けアルバイトで入っているんですが、草野君の入れるコーヒーは凄く美味しいんですよ」

「アルバイトを雇っていらっしやるんですか？」

「ええ。といつても、草野君一人だけですがね」柚木崎は苦笑した。やがて、草野がコーヒーをカップを運んできた。運ばれてきたコーヒーを一口飲む。確かに美味かった。

「では、本題に入りましょうか」柚木崎がゆつくりとした口調で言った。「ある団体を探っただけ、ということでしたが」

「はい」カップをテーブルに置いて、衣笠は言った。「私はT大学で応用物理学の教授をしています。調べて頂きたい団体には、本学の学生が関わっているのです」

「その団体とは？」

「翌檜イマジニア協会」衣笠は忌々しげに言った。「協会と言えば聞こえが良いですが、実際は、若者が主体のわけのわからない新興宗教です。その新興宗教にうちの大学の新興宗教研究会の生徒が嵌っているのです」

「新興宗教研究会、ですか」柚木崎が苦笑する。「しかし、そういうサークルなら新興宗教に興味を持つことは当然なのでは？」

「ああ、嵌っている、という言い方では語弊がありますね」衣笠は訂正した。「嵌っている、というレベルではありません。サークル自体が、もはや協会に乗っ取られているみたいなんです。サークルの入部希望者も凄まじい勢いで増えています」

話しながら、衣笠はここ数週間のことを思い出した。新興宗教研究会の活動自体、大学側からは大きく抵抗があった。よくわからない新興宗教の布教活動に学生が参加していることが発覚しては、大学のイメージダウンになるのだ。近隣住民の目に付く範囲内で彼らは行動するし、皮肉にもそういう活動は注目を浴びやすい。しかも、良い意味ではなく、不快感を持って注目を浴びてしまうのだ。

そして、衣笠が翌檜イマジニア協会の名を初めて聞いたのが二週間ほど前だ。T大に通う婿を持つという母親から電話があったのだ。

その学生の学籍は新潟で、今はこちらで一人で下宿しているらしい。彼女の話によると、新興宗教研究会に所属している息子から「サークルで必要だから」と二十万円の送金を頼まれたそうなのだ。結局押し切られる形になってお金を出してしまったが、息子が怪しげな宗教に入っているのではないか気になる、とその母親は大学に問い合わせてきたのだ。そこで事態が発覚し、職員会議の結果、衣笠が担当として問題解決に動くことになったのだ。

柚木崎はコーヒーを啜りながら話を聞いていたが、ゆっくりと力ツプを置くと「なるほど」と呟いた。「大学側としては、明確な理由なしに彼らを止めることは出来ない。そこで、問題のある団体かどうかを調べて欲しいということですね」

「そういうことです」衣笠が頷いた。「問題がなければ、大学としては関与できない。しかし、問題があればそれを理由にサークルの解散を提案できる、ということですよ。しかし、我々で調べるには限界がある……向こうもそれを気にしていますからね」

「その、何とか協会はいつ頃から出入りを？」

「本学で調べたところによると二ヶ月前……七月末ですね。このころから出入りは始まっていましたよ」

柚木崎は、なるほどなるほど、と何度も頷いた。そのまましばらく、何か考えるように黙り込んだ。

すでに空になっているのに気づき、草野がコーヒーカップを下げ始めた。そのままカップを持って立ち去ろうとする草野を、「ちょっと」と柚木崎が呼び止めた。

「何ですか？」怪訝そうに草野が振り返る。

草野の質問には答えず、衣笠のほうに向き直った柚木崎は「その宗教団体ですが、信者は大学生ばかりですか？」と尋ねた。

「ええ。彼らは信者ではなく会員だと言っています」

「なら」柚木崎は言いながら、今度は草野のほうを見る。「僕より草野君の方が探りやすい。彼は疑う余地のない、本物の大学生ですから」

「僕ですか？」草野が目を丸くする。「バイトの仕事内容には、探偵助手なんて無かったはずですけど」

「特別手当を出そう」柚木崎が微笑む。「それに……君も興味があるだろう？」

「興味があるのと、実際に捜査をするのとは別です」草野がすばやく答える。「でも……まあ、いいですよ。特別手当が出るんなら」「あの」今まで黙って二人のやり取りを見ていた衣笠は慌てて口を挟んだ。「えっと、草野さん……でしたっけ？失礼ですが、探偵として動いたことはないのでしょうか？」

「はい」

「それじゃあ……」衣笠は不満気に言った。いくらなんでも、探偵としての職務経験のない大学生では心もとない。金を払う以上、人員は徹底して欲しかった。

「ご心配なく」柚木崎が顎を摩りながら言った。「僕よりは社交術に長けています」

そういうことでは……と言いかけて、衣笠は口をつぐんだ。見たところ柚木崎は自分より年下ではあるが、二十代後半といったところだろう。大学生ばかりの新興宗教に潜入するには少しばかり無理があるようだった。それに、草野のほうに社交術に長けるといっても、先ほどから二人の所作を見ていて頷ける。ここは彼の言うとおりにしたほうがいいのだろう。

「わかました。が、調査費用は電話でお話した金額しか払えません」衣笠は毅然とした態度で答えた。

「結構ですよ」柚木崎が微笑んだ。「では、調査機関等の事務的な話に入りたいたいのですが……今日お時間は？」

「ああ、ちよつと……」衣笠は壁にかけられた時計を見やった。電車の時間等を考えて逆算すると、五限目に講義に間に合うためにはもうあと十五分弱でここを出なくてはならない。

「わかりました。その辺はまたファックスで送りしましょう。同意書も一緒に送るので、不備が無ければそちらにサインして後日持っ

てきて頂ければ結構です」

「お願いします」そう言っただけで頭を下げたとき、衣笠は気づいた。何だか焦げ臭い。

目の前の柚木崎と、その傍らに立つ草野は気づいていないようだった。どうも、ファンヒーター以外にエアコンも作動しているようだ。そのエアコンの風上に柚木崎たちが、風下に自分がいるので、彼らにはこの焦げ臭い臭いが届いていないのかもしれない。

「また何か動きがあったら、電話でも連絡をください。僕の仕事用の携帯電話の番号も教えておくので」柚木崎が言う。

「あ、と衣笠は適当な返事をした。やはり、焦げ臭い。「あの…

…」

「何ですか？」柚木崎が怪訝そうな顔でこちらを見る。

「焦げ臭くないですか？」衣笠は恐る恐る言った。

柚木崎の顔がすぐに真顔になる。

「草野くん！お餅だ！」柚木崎が叫んだ。

「は？」草野が間の抜けた返事を返す。「お餅って……」

「僕の部屋だ……ストーブの上で焼いていたんだ」言うなり柚木崎は奥の部屋へと走り出す。少しおいて、「うわあ、焦げてる！」と声が聞こえてくる。

「何やってるんですか、もう」呆れたように言うと、草野は濡れ布巾を持って奥の部屋へと去っていく。

衣笠は応接室に一人、残された。

何だか、頭が痛くなってきた。

潜入編

草野晋平は、柚木崎正一と電車で調査に向かうところだった。

協会の人間には柚木崎がネットで、晋平の名前でコンタクトを取ってある。お膳立ては柚木崎が済ましてくれたので、晋平の仕事は直接会って話すだけだった。

晋平自身は普段どおり、学生らしいラフな服装。柚木崎は珍しくスーツに身を包み、古びたジュラルミンケースを抱えていた。中身については、柚木崎からは何も聞かされていない。

目当ての駅で高校生の一団とすれ違いつつ、晋平と柚木崎は電車を降りた。乗る人間と比べて降りる人間は格別に少なく、ホームは一気に寂しい空気に包まれた。

「よし、今のうちに準備をしておこう」そう言って柚木崎はベンチに腰を下ろした。ジュラルミンケースを開けると、中から小型の通信機を取り出し、晋平に手渡した。

「ジャケットの内ポケットに本体を、イヤホンは袖の中に隠しておいてくれ。マイクは反対側の袖に仕込んでおく。こちらから連絡する場合は通信機が振動する。感づかれないように、さりげなく応答して」

晋平は言われたとおりに、通信機をジャケットの裏側に仕込んだ。その間に柚木崎は、小さなマイクと、ケーブルで繋がれたレコーダーとイヤホンを取り出した。

「これは盗聴器だ」柚木崎は晋平のジャケットにマイクを仕込んだ。「通信機のマイクは、ごく近くの小さな音しか拾えない。だから、向こうでの会話はこれで聞くことにする」

そう言つと、さらにもういくつかの盗聴器を晋平に手渡した。室内に設置するためのものだ。

「盗聴器を通した音声はワイヤレスでこの受信機に伝えられる。いったんレコーダーに録音されてから僕が聞くことになる」柚木崎が

続けた。

晋平は頷くと、残りの盗聴器をポケットにしまっておいた。

「柚木崎さんはどうするんです？」

「ある程度距離はとるけど、君の半径100m以内にはいると思うよ。ワイヤレスだから送受信の範囲には限界があるし」言いながら、柚木崎はジュラルミンケースを閉じた。「いいかい？ この階段を降りたところでイマジニア協会の人間が待っている、そういう手筈になっている。次の電車が着いたら、その電車に乗ってきた風を装って階段を降りるんだ。待っている奴の名前は吉井和人。申し送り事項は昨日確認したとおりだ。怪しまれないよう、話を合わせることに」

いいね、と言うように柚木崎が念を押した。

晋平が頷きかけたとき、ホームに電車が入ってきた。晋平は柚木崎と目を合わせると、電車を降りた乗客に混じり、ジャケットの中の通信機が目立たないように襟を正しながら、階段を降りていった。

9

階段下で待っていたのは、茶髪の優男だった。宗教に関わるタイプには思えなかったが、他に自分を待っているような人間がいない以上、彼が吉井和人なのだろう。晋平は迷わず男に近づいていった。男の方も晋平に気づいたようで、こちらに向かって片手を挙げた。

「吉井和人さんですか？」晋平は慎重に尋ねた。

「ああ、そうだよ。草野晋平君だよな」吉井が言った。「協会の事務所はここからそう遠くないよ。歩いていこう」

「あつ、はい」晋平は慌てて返事をする、吉井の後について歩き出した。

「草野君は法学部だっけ？」

「はい。S大の法学部です」晋平は答えた。「吉井さんは？」

一瞬、吉井が妙な表情をした。晋平はそれをすばやく見咎め、しまった、と思った。柚木崎からもらった申し送り事項には、互いの学部に関する会話もあったはずなのだ。

怪しまれたかもしれない、晋平はそう考えた。誤魔化す必要があった。

「いえ、あの、芸術工学部ということは知っていますが……その、ご専門は？」

「ああ」合点がいったという感じで、吉井が言った。「言ってなかったね。都市環境デザインなんだ」

「環境デザインというと、建築論とか？」

「まあ、メジャーなどここではね」吉井が苦笑した。「ただ……そうだね、通常の工学部の建築学科とは違うかな。いわゆる建築学が人間の居住環境に関わるものなら、都市環境デザインは、もっと公共性が高い。国土計画から、小さな公園まで関わってくるからね」

そうですか、と話を合わせながら、晋平はボタンに仕込んだ盗聴器のことを考えていた。この会話も柚木崎は聞いているのだろうかだとすれば、もっといろいろ聞き出すべきか？

感づかれないように、横目で吉井を見る。晋平のことを警戒しているようには思えなかった。が、事務所とやらに行つてからのほうが詳しい話が聞けるかもしれない。焦る必要はないのだから、ここは慎重にいったほうがいいだろう。こちらから下手に切り出すべきではない。

「やはり、卒業後は建築の方面に進むんですか？」晋平は当たり障りのないことを尋ねた。

「いや、協会のほうに専念するつもり」こともなげに吉井が言った。「うちの会員にはね、多いと思うよ。そういう奴」

思いがけず、向こうから協会の話を振ってきた。向こうから振ってきた分には話しても問題はないだろう。

「草野君はうちの協会のこと、T大の人から聞いたんだっけ？」

「ええ」草野は即答した。柚木崎からの申し送り事項にも書かれていたことだ。「その友達は興味がないようなんです、話を聞いていて関心が湧いたんです」

晋平が用意していた台詞を言うと、吉井は憮然とした態度で「そ

の友達は僕らのことを誤解しているね」と言った。

「僕らのことを新興宗教か何かだと思っっている人間が多いけど、そんなものじゃない。怪しげな、金目的のものとは違う、本物なんだ。世間にはおかしなカルト宗教が繁茂しているから、誤解されるのは仕方がないことかもしれないけれど」

「しかし、宗教であるという自覚は持たれているのでしょうか？」

「今の社会で認識されるカテゴリに属すなら、の話だよ」吉井は溜息をついた。「ただ直接的に宗教をアピールすれば、誤解を受けてしまう。だから翌檜イマジニア協会などと名乗っているんだけどね」そっちのほうに怪しげだけど、と晋平は思ったが黙っておいた。

「で、誰なの？ 君の友達って」

思わぬ質問に晋平はうろたえた。動揺が表情に出ないようにするだけで精一杯だった。

全力で平静を装い「言っけませんでしたっけ？」ととぼけた。

「うん」吉井が頷く。「事務所にT大の人がいてさ、その人が、君の友達も勧誘したいって」

「どうですかねえ、あいつは」何とか苦笑いに成功したが、内心はかなり焦っていた。柚木崎からの申し送り事項にはそんなこと、書いてなかった。適当な名前を言うか？ しかしT大生に話されたらすぐに気づかれる。

そのとき、ジャケットの中の通信機が震えた。髪をかきあげるふりをして耳元に袖を持っていくと、イヤホンから『法学部二年の道島悟』と柚木崎の声がした。その名前を口にしろということだろうか。とにかく、柚木崎の言うとおりにするしかなかった。

「法学部二年の道島って奴なんですけどね」晋平は平静を装って口にした。

「ふうん」自分から聞いてきたわりには興味なさげに吉井が言った。何とか切り抜けることには成功したが、晋平にはこの吉井という男が掴めなかった。軽薄そうなルックスに、愛想の良い言動。しかし、それが彼のすべてとは思えなかった。宗教に関わる人間なんて、

そんなものかもしれない。

「さあ、着いたよ」吉井が前方をあごでしゃくって言った。「この二階と三階が事務所。ちょっと待っててね。中の奴らに話を通してくるから」そう言っただけで吉井はビルの中に入っていった。

吉井が完全に視界から消えるのを見計らって、晋平は袖を耳元に近づけ、マイクに向かって小声で「柚木崎さん、聞いてました？」と呼びかけた。

『ああ。そこが事務所だつてね』

「柚木崎さんは今どこに？」言いながら周囲を探す。

『君の10mほど後ろだけど、君の位置からじゃ見えないかな。ところで、そのビルの一階には何が入ってる？』

「一階ですか？」晋平は再びビルに視線を戻す。「ええっと……喫茶店みたいです」

『なら、都合がいい』イヤホン越しに柚木崎が笑った。『君が事務所に入っている間、僕はそこにいることにしよう。店の中なら、ノートパソコンも使える』

「わかりました」

『それと、一つ気にかかることがある』

何ですか、と問い返そうとしたとき、吉井が戻ってくるが見えた。慌ててマイクを口元から話す。イヤホンはそのままにしておいた。

『吉井が戻ってきたようだね。手短に内容だけ言っておく。衣笠さんに連絡がつかない』

それだけ言っただけで一度通信は途絶えた。衣笠に連絡がつかないことがそんなに気にかかることだろうか。向こうも職のある身だ。いつも暇そうな柚木崎とは違い、忙しくて連絡がつかなくてもおかしいことではない。それとも、今日一日は柚木崎と連絡が取れるようになっていないはずなのだろうか。そういう約束をしていたということもあり得る。

「やあ、待たせてしまって悪かったね」吉井が言った。「実は、良い知らせがある」

「良い知らせ？」 晋平は首をかしげる。「何ですか？」

「うん。君の友達の、T大法学部の学生……道島くんだけ？ 今日ここに来てくれるそうだよ」

一瞬、表情が強張りかけた。しかし、道島という名前は柚木崎が無線で伝えてきた名前だ。何らかの手回しがあつて口にしたのだから。でなきゃ仮に本当にT大法学部に道島悟という男がいたとしても、ここへ来るといふ事態にはならないはずだ。

「へえ」 晋平は出来るだけ自然に見えるよう、軽く驚いてみせた。

「もう、連絡をとられたのですか？」

「え、ああ……」 吉井が少し動揺したように見えた。「うん。中にいる奴にT大の情報通がいてね、学生の名簿のようなものが手に入るんだ」

「そうですか……。へえ、あいつも来るんだ……」と一人で頷きながら、晋平は次のことを考えていた。

まず、学生の個人情報を宗教の勧誘に使うなどということは、犯罪の域に達しているのでは？

そして……

道島の存在を調べた、ということは彼らは……少なくとも吉井は自分を疑っている。

晋平は小さく息を吸い込むと、吉井と共にビルの入り口をくぐった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5117b/>

教祖冷笑

2010年11月26日16時19分発行